

男子学生のレジャースポーツ行動の参加動機に関する研究

— 定期的参加者と不定期的参加者との比較 —

西田俊夫（淑徳短期大学）

レジャースポーツ・生涯スポーツ・モチベーション・自由時間

I. 研究目的

大学生は、高齢者を除き自由時間を最も多く持っている。NHKの国民生活時間調査によれば、一週間 168時間のうち、3分の1の自由時間がある。¹⁾大学生は、スポーツ・運動をプレイし、レジャー活動として楽しむという意識と行動が顕著である。レジャースポーツの担い手は、学生を中心とした青年層で展開され、定着している。

一方、大学生は、受験勉強のひずみや日常生活の運動不足などで体力の低下が著しく、特に、柔軟性と持久力がない²⁾といわれて久しい。さらに、スポーツサークルや運動部への参加率も低下している。³⁾このように学生が不活動になる危険性を予防し、また、文化的存在としてのレジャースポーツが求め始められている。

レジャースポーツは、楽しみながらニュースポーツにチャレンジしたり、スポーツ・運動の技術・技能をのばしたりして、自己を鍛える特性をもっており、学生生活やこれからの人生を充実させるうえで重要な自己実現・自己啓発の場として提供してくれるものである。したがって、スポーツはレジャーの最もよい活用法の一つであるといえよう。

レジャースポーツの日常化・生涯化を推進していくためには、スポーツ・運動に対する欲求やスポーツ参加を規定する要因などスポーツに関する科学的リサーチが必要となってくる。以前からパーソナリティや態度といったアプローチの報告が多くなされている。⁴⁾

本研究では、男子学生のレジャースポーツへの参加動機を「スポーツ・運動をする」あるいは、「自由時間（レジャー）にスポーツ・運動をしたくなる」のはどのような心の動きがあるときなのか、また、スポーツ・運動に何を求め、何を期待しているのかを探ることを目的として、定期的参加者と不定期的参加者を対象に意識の比較を試みたのである。

II. 研究方法

(1) 対象者

対象者は、城西大学2年生 241名であり、そのなかで定期的参加者 117名、不定期的参加者 124名であった。

(2) 調査項目

調査項目は、男子学生のレジャースポーツ参加動機を把握するために、丹羽⁵⁾の参加動機内容を参考に、43項目テストを質問紙法によって実態調査を試みた。

(3) 調査の手続き

比較対照群は、全対象者の平均値より、4段階評価基準（とてもよくあてはまる—少しあてはまる—あまりあてはまらない—まったくあてはまらない）を設定した。

定期的参加者群は、週に1・2回以上定期的にスポーツ活動に参加し、不定期参加者群は月に2・3回はスポーツ活動に参加しているものの両群を比較対照群とした。

(4) 調査実施日

1993年5月25日（火曜日）と1994年5月17日（火曜日）

(5) 分析

統計処理は、城西大学大型計算機センターのSPSSプログラムを使用し、各項目に対する単純集計後、七検定を用いて有意差について検討した。また、集計後その結果は、各項目に平均値を示し、図表化した。

Ⅲ. 結果と考察

人々をスポーツ・運動にかりたてる欲求には、活動の欲求、集団所属の欲求、社会的承認の欲求、自己実現の欲求などがあげられる。これらの欲求が満足されると人はスポーツ・運動に強い関心を示し、それに打ち込む。そして、人は充足感を覚え、楽しさを経験する。楽しさを経験すればするほど無意識のうち、スポーツ行動に方向づけられるものである。

人々をレジャースポーツ行動にかりたて、リピートされる推進力ともいえる動機づけ（モチベーション）にはいろいろあるが、本研究では、丹羽ら⁹⁾の研究による動機9因子（活動性、人格形成、勧誘、親和、探索、社会的承認、技術・技能、健康、達成）を参考とし、そのいずれかを満たすために行動すると考えた。以下、それぞれの動機項目別に、定期的参加者群と不定期的参加者群との比較から考察する。

(1) 「親和性」動機について

親和性の動機項目は、定期的・不定期的参加者群を問わず、全体的に高い傾向を示していたが、特に「みんなと行動を共にすることができるから」、「仲間と心がふれあうから」「友達ができるから」の3項目であった。スポーツをすることによって、友達との仲間づくりや心のふれあいを期待している。スポーツを通しての親睦、親和が行動のきっかけに大きな影響を与えていることから親和性を求めている傾向が強くあらわれている。

(2) 「健康的」動機について

健康的動機項目は、定期・不定期的参加者群を問わず、全体的に高い傾向を示したものとして「健康のためによい」、「体力がつくから」の2項目であった。社会的な健康ブームは、学生にも好影響を与えた。スポーツ・運動をして体力を高めるということは、積極的な健康ということで意味がある。さらに、安全で、効果的で、楽しいというのがスポーツと健康の中で最も重要な要素である。

(3) 「活動性」動機について（表を参照）

活動性の動機項目は、定期・不定期的参加者群を問わず、全体的に高い傾向を示したものとして「スポーツが好きだから」、「スポーツをしたあと、気持ちがいいから」、「気晴らしになるから」の3項目であった。大学生は、スポーツ活動自体が好きであり、スポーツ・運動をすることによって、精神的・肉体的満足を得ることができるからである。

定期・不定期的参加者群との比較では、定期的参加者群の方が不定期的参加者群より、「スポーツをしたあとの充実感を味わえるから」、「思いきりからだを動かせるから」の2項目が高い傾向を示した。2項目の検定の結果でも有意な差が認められた。

(4) 「技能・技術」動機について（表を参照）

技能・技術動機項目は、定期・不定期的参加者群を問わず、全体的に高い傾向を示したものとして、「運動技術が向上するから」、「知っていてやりやすいから」の2項目であった。

スポーツ・運動を楽しむためには、基礎的な技術や技能を身につけなければならない。上手にできなかったものが、うまくできるようになると、スポーツ・運動をする楽しさが増すものである。運動技能の上達がすすむと、上達の喜びだけにとどまらず、そのスポー

ツ・運動のもつおもしろさやそのスポーツの特性から得られる喜びや楽しさを経験することができる。

定期・不定期的に参加者群との比較では、定期的参加者群の方が不定期的に参加者群より、「練習すると上達する見込みがあるから」の項目が高い傾向を示した。検定の結果でも有意な差が認められた。

(5) 「社会的承認」動機について (表を参照)

社会的承認の動機項目は、定期・不定期的に参加者群を問わず、全体的に低い傾向を示していた。不定期的に参加者群は、「人に自慢ができるから」、「スポーツをしているというだけで聞こえがいいから」の2項目が、定期的参加者群よりも高い傾向を示した。学生のスポーツ動向の特徴として、スポーツのファッション化があげられる。テニスやスキーに代表されるきわめてファッション性の強いスポーツがそうである。それは、聞こえがよく、自慢もできるからである。2項目の検定の結果でも有意な差が認められた。

(6) 「探索」動機について

探索の動機項目は、定期・不定期的に参加者群を問わず、全体的に高い傾向を示したものとして、「新しい経験をしてみたい」の1項目であった。

マスメディアが拍車をかけ、話題性のあるニューススポーツへの関心が高く、新しいものへと好奇心は旺盛であるが長続きはせず、あきらめやすい傾向が現代学生の特徴である。

定期・不定期的に参加者群との比較では、定期群より不定期群の方が、探索を求める傾向が高いが、両群間の差は有意として認められなかった。

表 (活動性)・(技術・技能的)・(社会的承認)・(人格形成的)動機の回答平均値及び有意差検定結果 (N=241)

(活動性動機)

項目内容	定期的参加者 (N=117)		不定期的に参加者 (N=124)		有意差
	M	SD	M	SD	
1. スポーツが好きだから	3.52	1.04	3.41	1.02	≧
2. 思いやりからだを動かせるから	3.63	1.05	2.89	0.74	
3. スポーツをしたあと充実感を味わえるから	3.24	0.95	2.65	0.72	
4. スポーツをしたあと気持ちがいいから	3.36	0.94	3.15	0.91	
5. 気晴らしになるから	3.34	0.91	3.32	0.95	

(社会的承認動機)

項目内容	定期的参加者 (N=117)		不定期的に参加者 (N=124)		有意差
	M	SD	M	SD	
1. 人に自慢ができるから	1.93	0.64	3.57	1.01	≦
2. 自分の能力を他人に認めてもらいたいから	2.18	0.71	1.97	0.66	
3. かっこいいから	2.12	0.68	2.23	0.74	
4. スポーツをしているというだけで聞こえがいいから	1.56	0.61	3.54	0.87	
5. スポーツで競争心が満足されるから	2.53	0.60	2.42	0.83	

(技術・技能的動機)

項目内容	定期的参加者 (N=117)		不定期的に参加者 (N=124)		有意差
	M	SD	M	SD	
1. 得意な種目があるから	2.23	0.75	2.12	0.73	≧
2. 運動技術が向上するから	2.81	0.84	2.62	0.76	
3. 知っていてやりやすいから	2.72	0.89	2.54	0.82	
4. スポーツが得意だから	2.51	0.68	2.57	0.75	
5. 練習すると上達する見込みがあるから	1.86	0.63	1.38	0.61	

(人格形成的動機)

項目内容	定期的参加者 (N=117)		不定期的に参加者 (N=124)		有意差
	M	SD	M	SD	
1. 決断力を養成するから	2.32	0.76	2.11	0.74	
2. 協調心を養えるから	2.86	0.78	2.31	0.72	
3. 明るい性格を養えるから	3.07	0.84	2.97	0.87	
4. 社会性を養えるから	2.21	0.71	2.14	0.74	
5. スポーツマナーを養成するから	2.41	0.75	2.23	0.72	

注1) t検定の結果、≧1%水準の有意差、≧5%水準の有意差を意味する。

注2) とてもよく 少く あまり まったく
あてはまる あてはまる あてはまらない あてはまらない (点数化)



(7) 「人格形成的」動機について（表を参照）

人格形成の動機項目は、定期・不定期的参加者群を問わず、全体的に低い傾向を示したにもかかわらず、定期的群が高い傾向を示したものとして「明るい性格が養えるから」の1項目があった。学生は、スポーツ・運動をすることによって耐えるとか根性をもつことを求めるのではなく、楽しいから、かつ好きだから自発的に行うのである。

(8) 「勧誘」動機について

勧誘の動機項目は、定期的参加者群は低い傾向を示していたが、不定期的参加者群は全体的に高い傾向を示した。特に、「友達がすすめるから」、「つきあいだから」の2項目が高い傾向を示した。検定の結果でも有意な差が認められた。不定期群は、受動的であり他人志向型である。したがって、勧誘因子は、定期的参加者群より不定期的参加者群の方が重要なファクターとなっていた。

(9) 「達成」動機について

達成動機項目は、定期・不定期参加者群を問わず、全体的に低い傾向を示した。この傾向は、3無主義と呼ばれているように、困難なことはできるだけさげ、安易で平坦な道を歩もうとする若者の考え方・生き方が、スポーツ・運動をすることにも反映されているようだ。

IV. 結論

本研究は、対象となった男子学生のレジャースポーツの参加動機、つまり、スポーツ・運動をするきっかけを、定期的参加者群と不定期的参加者群との比較から、分析することを目的としたものである。その結果、次のことが明らかになった。

1. 定期・不定期的参加群を問わず、共通したレジャースポーツへの参加傾向の高い動機は、親和性・活動性動機であり、これに対して低い傾向を示したものとしては、社会的承認・人格形成的・達成動機であった。

2. 定期的参加者群によるレジャースポーツへの参加動機項目のなかで最も高い傾向を示したものは、友達ができる、体力がつく、好きだから、スポーツ後の充実感、思いきり体を動かせるの5項目であったのに対して、最も低い傾向を示した項目は、人に自慢できる、かっこいい、聞こえがいい、友達がしている、友達がすすめる、つきあいの6項目であった。有意な差として、スポーツ後の充実感、体を動かせる、上達する見込が認められた。

3. 不定期的参加者群によるレジャースポーツへの参加動機項目の最も高い傾向を示したものは、行動を共にできる、友達ができる、健康のため、好きだから、気晴らし、知っていてやりやすいの6項目であり、これに対して最も低い傾向を示した項目は、スポーツ後の充実感、思いきり動かせる、上達する見込がある、根性ができる、困難なスポーツに挑戦の5項目であった。有意な差として、自慢できる、聞こえがいい、友達がすすめる、つきあいが認められた。

総まとめすると、スポーツに対する参加動機は、仲間たちと好きな時に気軽に楽しむことから、ファッションやレジャー感覚としてとらえる傾向が一層強まっている。

<引用文献>

- 1) NHK放送研究所世論調査部、「1990年度国民生活時間調査」、P.11~15、1991
- 2) 文部省体育局、「平成4年度体力・運動能力調査報告書」、P.6~8、1993
- 3) 日本私立大学協会、「大学生の学生生活に関するアンケート調査」、P.27、1993
- 4) 徳永幹雄他、「九大体育学研究4号-体育実技に対する態度の変容とその要因」、P.27~36、1972
- 5) 丹羽劭昭他、「体育学研究 Vol.24-女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究」、P.28~29、1979
- 6) 丹羽劭昭他、「体育学研究 Vol.23-女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」、P.110~118、1978